

藤浪博士の略歴

加 藤 一 夫

は し が き

内ヶ崎作三郎さんが英國ケンブリッヂ大學から歸つて、東京芝のユニテリアン教會に牧師となつた頃私は少時、そのお仕事を扶けさせてもらつたことがあります。

ユニテリアンはキリスト教の一派ではあるが、キリスト教側ではこれをキリスト教と認めたがらない程だから、内ヶ崎さんがこの教會の牧師となつたとは云へ、少しも牧師臭くはなく、日曜の説教などにも極めて自由に、政治を論じ、經濟を語り、社會情勢を批判すると云つた有様だつた。ところが、それが却つて、普通の教會に嫌らないもの、特に若い青年や學生の要求にかなつたと云ふ形で會堂

はいつもそれ等の人で一ぱいになる位であつた。

此の教會の幹部と云つたものには一高教授の三並良慶應教授の向軍治評論家の山路愛山をはじめ、も少し若いところでは、今岡信一良、相原一郎介、内藤濯吉、田絃次郎、鈴木文治等があつて、謂はゞ多士濟々であつた。そしてそのうちには、教會にはついぞ顔を見せたことはなかつたが、今こゝに此の思ひ出の綴られてゐるわが藤浪博士もあつた。

内ヶ崎さんは或日、私に云つた。

「君、藤浪君を訪ねて見てくれ給へ。藤浪君も我が教會員の一人なんだ」

このとき初めて私は、藤浪さんが今、順天堂醫員の一人で、獨逸留學から歸つたばかりのレントゲンの先驅者であるのを知つた。

藤浪さんはその頃、神田の或旅館に止宿してゐたが、まだ獨身であつた。内ヶ崎さんに云はれたので、私はやがて藤浪さんを訪ねたが、私たちは勿論宗教を語り合ふやうなことはなかつた。私はたゞ、藤浪さんは非常に物やさしい、親切な、そして謙遜な方だと云ふ印象をうけたことを覚えてゐる。そして此の印象は、

藤浪さんの生涯を通じて變らないものであつた。

この時以來ずっと、私達の交際はつゞけられた。私の結婚のときには、その頃すでに物集博士の令嬢たる奥さんを迎へられてゐた藤浪さん夫婦に仲人になつて頂いた位である。私はたゞ、その後、社會運動なんかしたために、御迷惑をかけては済まないと思つて、わざと餘り親しくしない様に心がけてゐた。が、それにも拘らず、私たちは常に、藤浪さん夫婦の御好意をうけて居た。ことに私が、社會運動から足を洗つて生活をきりかへるために非常な窮乏に陥つたときなどは、私の子供の教育費を出して下さつたりなどした。

これは實に、深く私の膽に銘じたことである。

それで、今度、藤浪さんが亡くなられると直ぐ私の頭に浮んで來たことは、せめてもの御恩報じに、藤浪さんの傳記を書いて、その美はしい人格を廣く世に傳へ、死んでも生きた藤浪さんをながく世に止めたいと云ふことであつた。ところが、何と云つても、今、日本は戰時體制下に在つて本にする紙さへも容易に手に這入らない状態であるのに悩んでゐたが、幸ひこゝに藤浪さんの友人や知己によ

り思ひ出が編まれることになつたので、その想ひ出のはじめに傳記を書くことを、奥さんから依頼された。

私の喜びは大きい。

勿論、これは傳記と云つても、ほんのその一端を綴るにすぎない略傳のやうなものである。ことに多忙のうちに急いで筆をとらねばならぬのであるから、満足なものが出来る筈はない。私の恐れることは、私がこれを書くことによつて反つて、藤浪さんの美はしい人格を穢してしまふのではないかと云ふことである。このことは先づ、藤浪さんの靈に對し、奥さまに對し、友人に對し、門下の諸君に對して、深くおわびをしなければならぬ。私としては、たゞ、私の最初の願ひの一端がこれによつて實現されたことを喜び、全力をそゝいで、これを仕上げようと思ふのみである。

修學時代

明治十三年六月七日、名古屋市東區久屋町に徳川御三家の一である尾張侯の

侍醫であつた由緒正しい藤浪家の四男として生れた少年藤浪さんは明治二十年、即ち七歳のとき、愛知縣立師範學校の附屬小學校に入學した。

この頃はもう、日本歴史を變革せしめた明治維新の大業も次第に整備し、教育の設備も全く面目を新たにしてゐたので、幼心の藤浪さんにも此のことがはつきりと意識されて居た。朗らかな明るい心をもつて、少年藤浪さんは此の新しい學校に入學し、常に快活な喜びのうちにすくすく成長して行つた。

小學校を終へると中學校である。明治二十六年の四月にはもう、彼は、縣立第一中學校の生徒であつた。

庭園にある花樹は、都會に生れた少年の心を、その昔人類の家であつた自然に結びつけるのには充分であつた。この家の庭に在る果樹もまた少年の原始的な胃の腑に喜びを與ふるとともに、純眞な心を喜ばせるものであつた。

明治二十九年、縣立第一中學校の四年を終了して東都に上るまでの四年間、中學生としての少年藤浪さんは、かうした最初の印象から逃れることなく、學業の合間々々には、家に居る書生と共に果樹の世話をしたり、日曜などには郊外に

出て、植物の採集をすることを楽しみとした。

後年、藤浪さんが、科學者にして而も單なる科學者ではなく、情操豊かなる自然の愛好者たりしことは恐らく、天性の然らしめたところではあらうが、同時にまた、少時の斯うした環境によることも大であつたのは想像に難くはない。

この間、藤浪さんは、たゞ、本にばかり囁りついたり、植物を採取して自然を楽しんだりするばかりでなく、身體の鍛錬に意を用ひ、中にも今までの日本には行はれなかつた野球を特に喜んだ。蓋し、これは彼が啻に身體をばかり強くすればよいと云つたやうな無趣味な性格ではなく、常に新しいものに憧れ、新しい世界を開拓して行かうとする進取的な氣性が如何に強かつたかを證するものである。

少年時代に於ける彼の特色はしかしこれに盡きるのではない。或はこれは兩親の思ひやりによつたのかも知れないが、中學生にしてすでに、藤浪さんは書や畫を學んでゐた。思ふに、中學の課程に勵み、運動に熱中し、自然に親んで植物の採集までやつてゐた中學生としては、こんな事にまで力をのばすのは容易の

ことではない。而も今も大體さうであるが、この頃の學生は一般に西洋かぶれをしてゐたために、英語や科學には熱中はしても、日本古來の書道や畫道などは十把一からげに無視した時である。かう云ふ時代、かう云ふ年頃に於て、特に書道や畫道に親しんだと云ふことは特筆大書すべき事實と云はねばならぬ。

藤浪さんは中學時代に於てこれを修めた。彼が後年、單なる科學者ではなく、眞に立派な人格者としての學者となり教育者となつたのは實に、中學時代に於ける此の修養に負ふところ大であつたのは云ふまでもない。因みに藤浪さんの教をうけた書家は鈴木眞庵氏であり、畫は鈴木不知氏に就いて學んだのである。

縣立第一中學を出ると藤浪さんは東京に上り、獨逸協會學校に入學し、當時この學校に教鞭をとつて居た三並良氏の家庭に厄介になる事となつた。

獨逸協會は獨逸自由派基督教の學校で、中學部と専門部とがあつた。普通の中學校ではすべて英語を正科として教へたが、この學校のみは獨逸語を教へたところに此學校の特色があつた。専門部もまた、獨逸流の哲學や神學を主とす

るものであつただけに、一部の人には注目され且つ重んぜられてゐた。

藤浪さんがこゝで獨逸語を學んだことは勿論であるが、同時に、三並さんの訓陶の下に在つて自由基督教の感化をうけた。後に彼がウヰーンに學んだのも、遠因はこゝに在つたかも知れないし、ユニテリアン教會の會員となつたのも、三並さんとの關係によるものであつた。また、藤浪さんがカチカチのクリスチヤンとならず、自由なる學徒として眞理を探求する様になつたのも、この學校及び三並さんの影響によるものと云ふべきであらう。

藤浪さんの天性、青少年時代の自然の感化、そして此の學校及び三並さんの家庭の環境。これ等の條件の下にもし自然の發達に任かしておいたならば、藤浪さんは恐らく、もつと別な方向に進んでゐたことであらう。しかしそれよりもつと大きな運命の決定力は、藤浪さんの家が代々醫家であつたと云ふことであつた。彼が明治三十四年、此の獨逸協會學校を出ると直ぐ、その翌年岡山の醫學専門學校に入學したのもその爲である。これによつて兎も角、藤浪さんの一生涯の進路が、はつきりと定まつたと云つてよい。

岡山の醫學専門學校は勿論、他の醫學専門學校同様に、實際的な刀圭家を養成するのが目的で、學者をつくることを主眼とはしてゐなかつた。藤浪さんはしかし別に期するところがあるかのやうに、コツ／＼と勉強して成績もまた抜群であつた。かくて明治三十九年、岡山醫學専門學校を卒業してもなほ同校の病理學教室に止まつて、病理學を研究した。しかし此教室はなほ、藤浪さんの大志を遂ぐるには充分でなかつた。そこで、一年の後再び東京にのぼり、東京帝國大學醫科大學皮膚科の介補となり、皮膚科の權威土肥博士の下にあつて、その指導をうけた。

土肥博士も既に他界された今、藤浪さんがその頃、學問的に何う云ふ功績を挙げてゐたかを知るよしもないが、博士夫人の眼に映じた藤浪さんは、その若さにも拘らず世にも稀な溫厚篤實な紳士であつた。中にも、年下な少年少女のよき友として保護者として、よく勞はりよく世話をする青年紳士であつた。

だが、これも亦、藤浪さんの最後の落着きどころではなかつた。そこで明治四十二年、即ち藤浪さんの三十歳のとき、醫學研究のために歐羅巴に渡つた。

歐羅巴に渡つた藤浪さんは、オーストリア國、ウキーン大學附屬病院のレントゲン學教室に於ては、主任ホルツクネヒト氏について、光線療學室に於ては、主任ラング氏について、ボリクリニツク・レントゲン教室に於ては、主任キンペツク氏について、レントゲン治療、光線療法等を研究した。

もつともこれは必ずしも、藤浪さんを洋行させた父の希望ではなかつた。父としては、充分の研究と實地の經驗を得て歸つて來た藤浪さんを、年老いた自分の後嗣として、名古屋で開業せしめたかつたのである。

藤浪さんとしては、直接治療に當り、病魔に冒されてゐる不幸な人を救ふと云ふことには、人並みすぐれた使命を感じては居たが、それよりも更に強い願望は、醫學の未開拓地を開拓することであつた。そしてそれには實に、まだやつと生ひ立つたばかりのレントゲンを研究して、それを完全に醫學療法に應用せんことであつた。

レントゲンの研究はまことに、一面藤浪さんの好學的 requirement を充すものであり、他面藤浪さんの博愛的欲求を實現せしむるものであつた。藤浪さんはこのこ



岡山醫專時代



とを、父にも兄にも書き送つて、その同意を求めた。京都帝大の教授である兄の鑑氏には勿論不同意であるべき筈はなかつた。父としても亦、藤浪さんがレントゲン専門と云つたやうな看板をかけて名古屋で開業するにはまだ時期早尙であり、従つて折角の家門を繼がせるわけには行かないとは考へたが、愛息の此の健氣な志望を挫く氣にはなれなかつた。のみならず考へ様によつては、これは、人の不幸を救はうとする神聖なる家業を廢することではなく、寧ろ、その發展と解すべきものである——何となればこれは新しい時代の知識と技能とをもつて新しい時代の治療に従事することだから——とも云へるであらう。

かくて藤浪さんは、安心してこの新しい學問と技術との研究をつゞけることが出来たのである。

ウキーン滯在中、藤浪さんは、實に研究に於て愉快であつたばかりでなく、生活に於てもまた甚だ愉快であつた。藤浪さんはこゝで、歐羅巴留學の多くの日本人は勿論、多くの漫遊者たちにも接した。そして、土地不馴れな人々を案内したり、知名の士に紹介したりした。そしてそれは實に人に親切をつくしたいと云

ふ彼の天性に適ふ楽しい仕事の一つであつた。

藤浪さんは決して、たゞ研究すればよいと云ふやうな謂ゆる學究ではなかつた。滯在中彼は多くの知名の士を訪問し、また歴史的に有名なる地や、名勝の地を探ることを樂しみとした。而もそれはたゞ物好きにさうするのでもなく、歸朝後の語草にしようとする淺墓な考へからでもなかつた。彼の生活はそのまま研究であつた。——たゞ醫學上の研究のみならず、歴史上のことにも於ても、世情人心についても、社會情勢についても、すべては皆、藤浪さんの研究の對象であつた。

ウキーリンに於けるレントゲン研究を終つて歸朝したのは、明治四十五年一月であつた。

レントゲンについては理論的には既に知られて居たとは云へ、これを治療の實際にあてはめることはまだ日本には行はれてゐなかつた。ところが藤浪さんは今、これを理論的にも實際的にも研究して歸つた日本最初のレントゲンの

權威であつた。

歸ると早々、順天堂病院から招聘せられ、同年四月、順天堂病院のレントゲン科長に任せられた。斯界に於ける藤浪さんの權威が次第に知れ渡るにつれ、治療を受けようとする病者は日々に多くなつた。

設備のために忙しかつた藤浪さんはやがて治療のためにも忙しくなつた。

しかし藤浪さんは頑健そのものであるかの如く、疲れを知らなかつた。彼は真剣であつた。彼は誠實であつた。診斷や治療に從事して居る間、彼は實に戰場の勇士の如くであつた。綿密であり、几帳面であり、如何なることも忽にしない彼の前にあつては、如何に親しい者と雖も、如何に優れた助手と雖も、その些細な過失や不注意を許されなかつた。かくして人々は皆、藤浪さんの前にピリ／＼として居た。しかし仕事を終へるや否や、藤浪さんは全く別人の如く、やさしい、親切な男であつた。助手に對して、學生に對して、患者に對して、これは實に藤浪さんの一生涯を通じての態度であつた。そしてそれ故にこそ藤浪さんは、人々から無上の尊敬と信賴を拂はれたのであつた。

大正四年の二月に藤浪さんは醫學博士の學位を受けられた。それはこの忙しい間に提出した論文によるものであつたが、提出された主論文は

「空虚なる胃中に於て分泌を診定する簡易なるレントゲン検査法」と云ふので

あり、参考論文としては

- 1、胃の幽門痙攣、分泌過剰及運動障礙について
- 2、胃の運動力に關する參照試驗について
- 3、抗酸性にして視られ得べき丸子のレヨンチエン検査に於ける價値、並に、グルトイド囊及ケロドラート囊の用途について
- 4、フインゼン燈を喉頭狼瘡の治療に應用する一新法について
- 5、佝僂病に於ける腕骨の化骨について
- 6、腕骨の化骨について

等で、何れも皆、獨文で書かれたものであつた。

この頃、慶應義塾は完全なる綜合大學たらんがために醫學部を増設しようと

してゐた。そして醫學部を新鮮なものとせんがために當時まだ何處の大學にも完全な教室をもつて居なかつたレントゲン科をおくこととし、その創設を藤浪さんに托した。

藤浪さんはこれを快くうけた。と云ふよりは、さながら自らの仕事であるかの如き熱情をもつて、此の大學生理學的診療科を設置するだめに努力した。藤浪さんが此科の主任教授となつたのは云ふまでもないが、醫學部教授として慶應の醫學部増設のために奔走したのは忘れることが出来ない。

學校に於ては藤浪さんは嚴格なる父の如くであり、慈愛あふるゝ母のやうでもあつた。病院に於ては責任を重んじ親切な刀圭家として、患者の信賴を博した。藤浪さんの部屋は常にキッチンと整頓せられ、居心地のよい天國であつた。

この時以來死に至るまで、こゝが藤浪さんの職場であつたが、藤浪さんは決して、大學の門を一步も離れない窮屈な學者ではなかつた。大學に於てはよき教授であり、病院に於てよき先生であると共に、家庭に於てはよき夫であり、社會に於てはよき指導者であつた。そして至るところに、その鮮な足跡を残した。こ

れ等のことについては別に章を改めて述べることとするが、略歴としてこゝに是非記録しておかなければならぬことは、この間に藤浪さんが多くの書を著し、多くの學會を創設し、または多くの學會や協會に關係し、世道人心を裨益する事が實に多かつたのである。

今その重なるものを擧ぐれば

大正十二年には日本レントゲン學會を同志と共に創設し、その幹事に選ばれた。

昭和二年には富士川博士を中心として日本醫史學會が創立されたが、その理事に推された。

昭和五年には日本溫泉學會が設立され、その理事となつた。

日本レントゲン學會は昭和八年の六月に分裂し、その分派は日本放射線醫學會と稱したが、藤浪さんはその放射線醫學會の幹事に選ばれた。

昭和十年には日本溫泉氣候學會と云ふのが創立されたが、同會の理事となつた。

昭和十二年の四月にはオーストリアのレントゲン學會からその名譽會員に推された。

昭和十五年には、さきに分れた日本レントゲン學會と日本放射線醫學會が合併して日本醫學放射線學會となつたが、同會の幹事に推された。

昭和十六年には、さきに創立した日本醫史學會がその創立者たる富士川博士を失つたので、その後任として理事長に推された。

また同年、日本溫泉科學々會が創立されたが、同會の副會長に推された。

これによつて見ても、藤浪さんが如何に日本のレントゲン學の發達のために盡し、如何に多くの貢献を遺されたかを知ることが出来るが、こゝに注意すべきは、右の足跡に見ても、啻にレントゲンのためのみでなく、溫泉學のために、また、醫史學のために、盡されたと云ふことがわかる。而もこれは、單なる餘業や餘技としてではなく、その精根をさゝげた程の事業であつたのである。

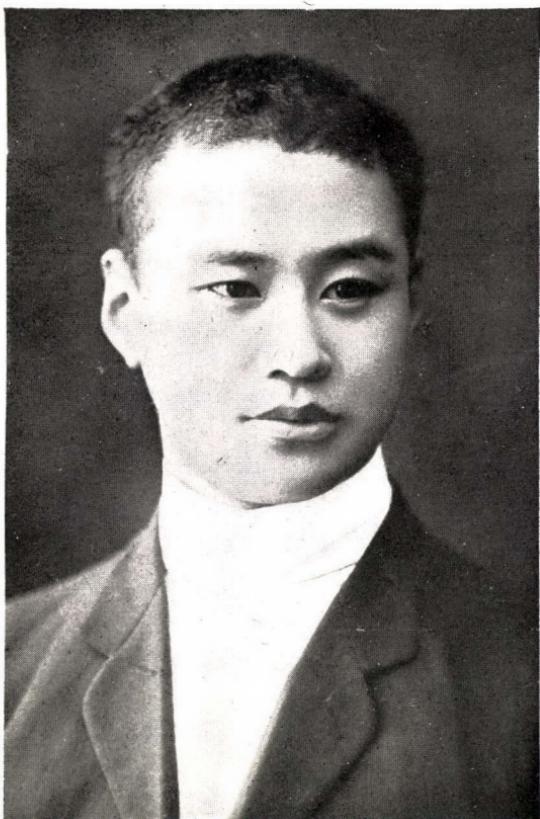
しかし藤浪さんの仕事はこれでつくるのではない。彼は更に、名墓顯彰會の幹事として、故人の業蹟や徳をたゞへる事に努力し、夫人と共に、ひまあるごとに

諸方を巡つて埋もれた墓をおこし「掃苔」と云ふ雑誌まで出し、杉山檢校遺徳顯彰會には、吳秀三博士の後をつがれてその會長となられたが、これも亦偉大なる足跡をのこした故人の徳を顯彰すると共に、日本的なものを保護しようと云ふ志からであることは勿論である。

人の品格はその事業によつて判断することが出来る。随分大きな足跡を遺して行つた人はある。我々はしかし必ずしもそれ等の人を尊敬しない。何故なら、たとひその足跡は偉大であつても、それは必ずしも品格を備へたものとは云はれないからである。ところがわが藤浪さんのときは、世間に目だつ偉大なる仕事には興味がなかつた。藤浪さんの熱情を沸かしたものは、たとひそれが偉大なる事ではなくとも、それが人の爲になる事であればよいのであつた。そしてこゝに、藤浪さんの優れた品格がある。

人としての藤浪さん

藤浪さんの傳を書くに當り、先づ第一に頭に浮んで來るのは、その人としての



明治四十年頃

性格である。何となれば我々は、斯くも圓満なる人格を、滅多に他に見出しえないからである。

圓満と云つても、普通に考へられて居るやうに只だ活達自在と云つたやうなものでない。かう云ふことにかけては缺陷があるが、かう云ふことに非常に發達して居ると云つたやうなそんな偏狹さが少しもなく、人間として斯くあるべきだと云ふ性格が圓満に満邊なく發達して居ると云つた意味に於てのことである。

中にも最も顯著な藤浪さんの性格は「まこと」と云ふことである。實際、藤浪さんの一生は徹頭徹尾まことをもつて貫いて居たと云つてもよい。その一つの例として私は、彼が岡山の醫學校に居た頃のことを擧げることが出来る。

岡山醫學専門學校に共に學んだ山口政一氏は、藤浪さんについてこんな思ひ出を書いてゐる。

〔昔日を忍んで遡る四十餘年、雛鳳の搖籃岡山の醫學舎、紅顏の新入生、後日の大博士、東都獨逸協會の出身、吾人また中學に獨逸語を兼修せる三年の上級生とし

て共に當時獨語の權威高橋金一郎教授指導獨語特別班列席の知己たり。又所屬の教會をも同じくして、若き日の親交愈々厚きを加へたれば、予の所持するところの學用骨格貸與の關係ありしが、進級に従ひ不要に歸せしに、その骨格返附に際し、中指と示指の末節二個紛失の辯疏に加へて必ず補填の策を講ぜんことを誓約せられたれば、平素の心安さに今は予も不要のもの故、その配慮の要なきを答へしに、若き同窓、肅然容を改むるところありて曰く「骨の所有者にはかくても濟むべけんも、此骨の主たりし人に對するとき、只二節の骨片紛失と雖も禮を失すること甚だし。これを放置すること愈々申譯なき事なれば誓つて搜索原狀に復さん」とする旨堅く言明せられ、これを聽くもの頓かに襟を正して感激久しかりし一場は、奔放自由の年少氣銳の學生時代にありては世に稀有なる光景にして、後年の眞摯なる埋骨の處、掃苔觀念の淵源するところ、誠に深厚なるものあるに思ひ到らざるを得ざるなり」

「持主にとつてはもうなくともよいだらう。だがこの骨の主であつた人には濟まない。これを放つておくと云ふやうなことはその人に對して禮を失する

も甚しい」かう云つたデリケートな心持は誰にもあるだらうか。特に山口氏も云つてゐるやうに、これを云つた人は、まだ年齢も行かぬ一青年にすぎない。そのやうな青年の誰が一體、かうも眞摯に考へらるゝであらうか。物の問題ではない。金錢の問題ではない。大きな精神的な問題である。藤浪さんは實に、その青年の頃すでに、かう云ふことに氣がついた程、まことの人であつたのである。そして此の心がけは決して、一生失はれはしなかつた。否その生涯を通じて、この本性は一層磨きをかけられ、凡ゆることに顯はれてゐる。後年、レントゲンの研究に於て骨の發育とレントゲンの關係や手足の骨の發生など、骨に關する多くの業蹟を遺したごときも、學生時代に於ける此の事件が因をなして居たとも云へるであらう。また既に死んで居る人にもなほ斯くのごとく敬虔であつたと云ふことはやがて、醫家先哲の徳を慕つて、多大の費用と時間とをも惜まず、その肖像を集めて本としたり埋もれ廢れた墓を興すと共にそれによつて故人の徳を顯はさうとしたりして、いろいろの事業をされたものとも云はれるであらうと思はれる。

藤浪さんの名墓顯彰は決して、趣味や好事からではなかつた。無論この種の人によつて多く行はれる骨董趣味からやつたのではなかつた。それはたゞ、埋もれた人の徳や功績を掘り起さうとするまことの產物であつた。

藤浪さんに接した誰もが感することは、彼が何時もニコ／＼して居り、なごやかであり、親切であることであつた。「掃苔」の藤浪剛一博士追悼錄で誰であつたか、聖徳太子は和を以て尊しと云はれたが、藤浪先生はそれを御自分の生活に於いて示されたと云つたやうなことを云つて居たと思ふが、まことにその通りで、藤浪さんはまさに大和の人であつた。

藤浪さんはどんな人にも親切であり、どんな人をも尊重し、どんな人からもその長所美所を掘り出さうとした。それは斯くの如くしなければならぬと云つたやうな義務からするのではなく、もとより、こゝろにもない附焼刃的なものでもなかつた。すべてはみな、さうしないでは居られない、彼のまことから出て来るものであつた。

と云つて、これは決して、無智な母親がその子に對してするやうな馬鹿可愛が

りやうでもなかつた。善いことは善いとし悪いことは悪いとして、決して物を忽にしない。學生や助手が藤浪さんを恐い先生として尊敬したのは、さう云つたことのためである。

物を忽にしないと云ふことはやがて几帳面と云ふことにもなる。あの忙しさのうちに在つてもなほ、家も研究室もあの様に整頓してゐたのは、藤浪さんの几帳面さのためである。

その忙はしさのうちにもなほ、几帳面に手紙を書き、几帳面に人を訪問する。而もその手紙は、簡単ではあるが卒直で飾氣がなく、ぞんざいな字などは決して書かない。月々損をして出して居る[掃蕎]に原稿を頼めば、必ずその稿料を送つて勞に酬ふることを忘れない。雑誌發行の期日を正確にするためには、印刷屋が恐れをなすほどにも催促をする。

これ等はすべて、そのまことから出ることであつて、毫頭、私利私慾から出るのではない。隨分いろいろの會に關係し、いろいろの會合に出て世話を焼いたが、その會を利用して、自分の名をあげようとか、自分の利益をあげようとするやう

なことは絶対になかつた。大東亞戦争が始まつてから此の方滅私奉公と云つたやうな標語が盛んに用ひられ、事實日本精神はこの滅私奉公であるが、藤浪さん的一生は全くこれであつた。

尾佐竹猛氏は、その思ひ出のうちに

「藤浪さんの人格についてはそれ／＼の方からお話があらうと存じますが、私の感じました一面は、種々の學會に關係なされ、あらゆる出費を爲されたにも拘らず、決して表面に名を出さうとなされなかつた奥床しさであります。世には兎角、名前を出したがつたり、中にはわざ／＼自分の苗字を研究所や學會等の名に冠したがるかの如きは、私の唾棄するところです。それからまた、僅かの金を出して、自分が表面に立ち、その淺薄なる趣味や知識を押し賣りしたがる人間も多いのであります。此種の人間は私は蛇蝎視してゐるのであります。然るに藤浪さんは全くこれと正反対の人格を有して居られたのには、私の傾倒を禁ずる能はなかつたのであります……」

と語つて居られるが、これは尾佐竹氏それ自身の人格の奥床しさを示すもの

であると共に、よく藤浪さんを洞觀されたものと云つてよい。

會があつて、その會の中心となつて居ながら、藤浪さんは決して傲然と構へるやうなことはなかつた。さながらその會の小使かなんかのやうに、まめ／＼しく立ち働いて世話をしたのみならず、集つて來た人の特徴や長所を見ぬいて、それを發揮せしむる機會を與へることに努力した。これは、啻に自分を表はさうとしなかつたばかりでなく、他人を持ち上げようとする人の大きさを示すものである。

斯くの如く、藤浪さんは、如何なる場合、如何なる處に於ても、全く己と云ふものがなかつた。藤浪さんの生涯にとつては、滅私と云ふ言葉ほど適切な表現は見出されないと私は思ふ。

藤浪さんと雖も時々人を批評したり社會を批評することがあつた。そしてそれは、大概の場合、正鵠を失して居なかつた。しかし、こゝに注意すべきは、それは決して、人や物を傷つけんがためではなかつた。多くの場合それは、罪のない評言であるか、さうでなくともその批評するゝものを育てんがためであつた。

私は藤浪さんの斯うした一面を見るとき直ちに、黒住宗忠のことを思ひ出す。

黒住宗忠と云ふ人は黒住教の開祖であるのは誰も知つてゐるが、彼の眞の偉大さはまだ充分に認識されてゐるとは云はれない。しかし私の見るところでは、彼は實に日本の宗教的偉人であるばかりでなく、世界の宗教家のうちで、否、基督教や釋迦でさへ、彼に及ぶものは一人もないと思ふ位である。

この宗忠は決して怒らなかつた。或るとき酒に酔つて狂亂した武士が岡山城下で二十人もの人を斬り殺して居るところに出くわして、「場所からで御座るぞ」と大喝一聲し、そのためにその狂武士の亂暴は止んだと云ふことであるが、これは怒つたと云ふのではなく、寧ろ、その士を罪より救つてやうと云ふ天の聲であつた。宗忠は常に、怒つてはならない。怒ると云ふことは私情がある。

その私情はまた相手の私情をいやが上に募らせるばかりであつて何の益にもならぬのみか、大きな禍となる。それよりも人の長所を見出すことである。人の悪いことを見出しても、その人のうちにある善いところ、即ちその人の神を引き出してやる態度に出なければならぬ、と云つたやうなことをもつて人をさと

してゐた。そしてこれは實に、藤浪さんの日常の態度であつた。

家庭人としての藤浪さん

「私は一ぺんでもいゝから藤浪博士の怒つた顔を見たいと念願したが、どうとう御生存中見ることは出来なかつた。甚だ殘念に思つて居ます。掃苔會の總會のあつたとき、陳列中の獨逸の掃苔に關する雑誌が一冊だけ紛失して、その犯人は判つてしまふますが、現場を見てゐないので困つてしまつたとき、少々語氣に強きところが現はれたので、この時は怒つてくれるとなど樂しみにしてゐましたが、到頭ものになりませんでした。藤浪博士は怒つたことのない人か奥さんにお聞きして見たいと思つて居ましたがその機會を得ませんでした。こんどお目にかゝつたときお聞かせ下さい」

宮尾しげを氏はその追憶記の冒頭でかう云つて居る。ところが私はかつて、藤浪さんの怒つてゐるのを見たことがある。が、厳密に云つてそれは怒つたのではない。隨分語氣を烈しくして、助手を叱つて居たのであるが、叱ると云ふこ

とは必ずしも怒るのではない。もつとも多くの人のうちには叱るのではなく怒るのだと云ふのが適當なやり方をするのが多いのであるが、藤浪さんの場合は、前節に云つた黒住宗忠のやうに、そのうちに私情を挟んで怒るのではなく相手のうちから善いものを引き出すために叱るのである。もつと詳しく云ふと、藤浪さんはたゞ凡てのこととに責任を重んじ、助手や看護婦がそれをなほざりにすることを責めたのである。而もそれは助手や看護婦にもその同じ責任感をもたせるためであつたのである。して見ると、私もやはり、藤浪さんの怒つた顔を見たことがないのである。

ことに私は、家庭に於て藤浪さんの怒つてゐるのを見たことがない。家庭の内部のことがわかるほど私は、藤浪さんの家庭に出入したことがないのだから、これは寧ろ當然なことであるかも知れない。私はしかし確信をもつて云ふことが出来る。「藤浪さんはその生涯を通じて、家庭に於て怒つたことはない」と。蓋しこれを云ふのは、藤浪さんの家庭が理想的に大和の世界であつたからである。

藤浪さんは、謂ゆるフェミニストではなかつたが、夫人を尊重した。夫人はまた、妻と云ふものは夫の奴隸たるべきものだなどとは毫頭も考へて居ないが、夫を尊重した。かくてこの家庭には、互に信頼し合ふ獨立の夫があり妻があつたのである。

学校や社會に在つて多忙な夫は、家庭に歸つて文字どほり憩ひのオアシスを見出した。何故なれば、こゝに來ると、夫の仕事を理解し、心からそれを扶けようとする夫人があつたからである。客が來るとそれを心から歡待する夫人があつたからである。本を讀んだり、研究に没頭すると、それを心から勞はる夫人があつたからである。

夫人が凡てのことにつけて藤浪さんの仕事を扶けたのは云ふまでもないが、中にも藤浪さんが名墓顯彰會の幹事として又會長として、故人の徳を顯彰し、「掃蕎」と云ふ雑誌をまで發行するや、夫人は藤浪さんと一緒に埋もれた墓を探しに出かけたり、「掃蕎」の編輯を手傳つたりしたことは有名で、會の人々から非常な感謝をさゝげられてゐるのは周知のことである。

もとよりこれは夫人の賢明によるものではあるが、同時に、夫人をして斯くの如き内助を敢えてせしむるには、夫たる藤浪さんの徳があつたからであるのを忘れてはならない。藤浪さんは家庭人としてもまた理想的であつたのである。

教育者としての藤浪さん

藤浪教授が亡くなられてから間もなく慶應義塾大學醫學部で慶應義塾大學としての追悼會が行はれた。

追悼會には、未亡人をはじめ、大學教授、學生その他で、會場がぎつしり一ぱいにつまり、簡素な式場には故人の笑みを含んだ寫眞が飾られて居た。追悼會がいつも嚴肅にこゝで行はれたのである。

私もこの追悼會に臨んだ一人であるが、何よりも私を喜ばせたことは、この會が何等儀禮的なものでなく、眞に故人を悼む表情に溢れて居たことである。

藤浪教授は勿論、慶應に醫學部が増設された時からの教授で、謂はゞその生みの親のやうなものである。だが、この追悼會はたゞ、さうした關係から、儀禮的に

行はれたものでないことは、當日こゝで藤浪教授について語つた人々の眞剣な態度からも、その話の内容からもはつきりと酌み取ることが出来る。

學校關係の人々からは、慶應に醫學部設置の當初から藤浪教授が此の醫學部のために如何に骨を折られたかを感謝された。教授たちからは彼の學的業蹟が報告せられ、病氣の經過及び解剖によつて得られた諸々の症狀が詳しく述べられた。しかし中でも最も私を感動せしめたものは、故教授の門下生や學生たちの切々たる追悼の辭だつた。

何となれば、これによつて私は、門下生や學生たちが、教授の死を如何に大なる損失として居るか、如何に深き悲しみのうちに浸つて居るかを眼のあたり見ることが出来たと共に、教育者としての藤浪教授の一面を遺憾なく看取することが出来たからである。

これ等の人々の話をきいて居る間に私の感じたことは、藤浪教授は決して知識の傳達をもつて、その天職の凡てとすることなく、同時に、と云ふよりはそれ以上に人格の養成に力を注いだのだと云ふことである。

門下生や學生たちの言明するところから察すると、藤浪教授は一面實に厳格であると共に、他面實に愛情に充ちた親切な教育者であつた。

この二つの面は、一見相反する性格であるかのやうであつて、實は全く一致する性格の反映であることは云ふまでもない。

私は嘗つて藤浪さんが、診斷中一助手に嚴格であるのを見たことは前にも云つた。これはしかし助手に對してだけではなく、學生に對しても同様であつた。たとへば、學生がやつて來なければならぬことをやつて來ないときには非常にやかましかつた。レントゲン寫眞が一同で通過すると云ふやうなことも滅多になかつた。二度、ことによると三度もやりかへて、やつと通過すると云ふやうなことも珍しくはなかつた。勿論これは、患者に對する責任感や親切心の表はれであるのは云ふまでもないが、學生や助手にもその同じ考をもたせ、同じ習慣をつけさせるためであつた。

かう云ふことは、助手や學生以外、巷間藤浪さんに接する人には決してなかつた。だから人は多く、藤浪さんのかうした一面を見のがしてゐる。掃苔の藤浪

剛一博士追悼錄」中にも、玉林晴朗氏は「いつも私の御目にかゝつた博士はニコニコとせられてゐた。そして穏和な態度で懐しく色々と話をされたので、つい良い氣になつてしまひ……慶應の醫科を出た義弟に「學校に於ける藤浪博士は随分と厳格であつて、學生の間では大變にコハイ先生として定評がある」と云ふ話をきいて、はじめてその一面を識つた」と云ふやうなことを書かれてゐるが、さもあるべしと思はれる。

しかしながら、それは勿論一面である。藤浪教授はまた、此の上もなく親切な善い先生であつた。教授の訓陶をうけた北里文太郎氏の追悼文を読んで見ても、容易にそれがわかる。文中には現に博士の教授をうけて居る令弟からの手紙も採録されて居るが、これによつて見ても、この二人が藤浪さんに如何に愛されて來たか、早く父を失つた二人が、藤浪教授を父の如く慕つてゐる眞情がまざと描き出されてゐる。

この追悼文を讀んで感することは、教授の教育は實にその教室に於て行はれるばかりでなく、教室の外に於ても行はれたと云ふことである。北里氏はよく

家庭に教授を訪問したらしいが、家庭に於ける教授夫妻は實に親切であつた。こまくとした注意を與へたのは勿論であるが、このほかにも教授は家庭に来る學生に貴重な本を貸し與へたり、文献をしらべる時の注意やその方法を教へたりした。

かう云ふことは、教室で知識の切賣りをしてゐる人には到底あり得ない親切であると思はれる。

子供を愛し、よく育てる。これが彼の樂しみでもあり、教育者的本性でもあつた。追悼錄や追悼の辭にはこのことにはあまり觸れてないやうだが、藤浪さんが富裕でない友人の子供のために盡したことは少くない。或者には學資を與へ或者には書籍を與へ、或者には家庭で歡待した。

このことが餘り語られなかつたのは、教授がかうしたことと他人に知られることを好まなかつたからである。人の上に立つたり、己を表はすことを好まなかつた藤浪教授の斯うした隠れた善行は特筆大書すべきである。



明治四十四年維納にて

レントゲン研究の先驅者

藤浪さんの仕事のうち、何と云つても最も大きなのは、多くの医家に先驅してレントゲンを研究しこれを病氣の診斷治療に役立たせたことである。

藤浪さんがウキーンに留学した頃、レントゲンの學的研究は無論あつたが、これを治療に應用すると云ふことは、未だ多くの人の注意を惹いて居なかつた。しかし、藤浪さんは醫學上レントゲンの齎す功果の偉大なるべきことを直感した。そこで、歐洲にもまだ餘り行はれてゐなかつたレントゲンの醫學的研究をはじめた。

何ごとによらず、人に先驅して新しい途を切りひらいて行くと云ふことは、中々容易なことではなく、危険ですらもあることは、誰しも知つてゐる。殊に藤浪さんにとつては、日本に歸れば父祖の開拓して呉れた大きな地盤がある。が藤浪さんは此の平坦な道を歩まうとはせず、海のものとも山のものともわからぬ此の新路の開拓を選んだ。こゝに我等は生活の安易を求むる單なる醫師とし

てではなく、科學者としての藤浪剛一を見る。

實際、日本の醫界に理學的療法を創始し、普及せしめた者は我が藤浪さんである。それ故に、このことは何と云つても、藤浪さんの仕事のうちでも最も大きなものであると云はねばならぬ。

順天堂に於て實際の治療に從事し、慶應の醫學部に於て此の講座を受持たれたほかに、藤浪さんは更に、著書に於てその普及をはかられた。

今その重なる著書を拾つて見ると次のやうなものがある。

歯科レントゲン學

れんとげん治療學

内臟れんとげん診斷學

レントゲン寫眞圖譜

れんとげん學

ラヂウム治療法

光と生物

醫史學の研究者として

科學者としての藤浪さんはレントゲン研究に盡きるのではない。藤浪さんの興味は更に祖國日本に結びついてゐる。中にも醫史學に於ける功績はその最たるものであらう。

醫史學は元來富士川游博士の創意に基くものであるが、藤浪さんはその最初からの協力者であり、醫史學會の創立せらるゝや、その理事に推された。

醫史學などと云ふと、徒らなる古醫書の蒐集を目的とする道樂のやうに思はれ勝ちであるが、實は我國將來の醫學の上に重要な意義を持つものである。世に溫故知新といふ言葉があるが、醫史學も即ち其の學問であつて、現代のわが醫學の發達に寄與した先賢の苦心努力の跡をたづねる事によつて現在の醫學を検討し反省し、これによつて將來への正しき方向を定めんとするものに外ならぬ。

この頃、わが國の醫政上に於て醫道昂揚が殊に叫ばれつゝあるがこれは西洋醫學を輸入するに急であつたわが明治以來の風潮が餘りに物質的な形を取りて發達した現代の醫學上の病弊を、それ以前のわが先賢の行藏によつて反省し、西洋醫學の持つ弱點を除去し東西の美點を一括した日本醫學を建設せんとする其の理想の一つの現はれであるが、醫史學はその目的を即ちこゝに有するのである。

藤浪さんの古書蒐集は實に此の研究の爲めであるが、従つてそれには常に熱情的なものがあつた。このためには如何なる勞苦をも、如何なる出費をも厭はなかつたが、多忙な藤浪さんはわざわざ自分で出かけて行つて、多くの時間や金錢を費さなくとも自然と集まつて来るやうにしてゐた。有名な古書店に連絡をとつてゐるのは勿論であるが、持つて來た本が案外無價値なものであつても、また既に買取つてあるものであつても、決してこれを斷ることがなく、而も先方の云ひなりに高價をも辭せずこれを買取つた。藤浪さんのところに澤山の本が集まつて來たのはこのためであると云つても敢えて過言でないであらう。

序でだから云つておくが、こんなに熱情をこめて輯めた本であるにも拘らず、これを見たいと云ふ人には心おきなくこれを貸與したと云ふことである。池上幸二郎氏の思ひ出にこんなことがある。

「初めて先生に御目にかかりつた折私は深く、先生の人格に打たれたことがあります。それは私が初めて修理すべき書物を受取りに御自宅に伺つて預り證を差出さうとしたところ、そんな物は君いらないよ。君を信してゐるからね」と云つておられたことである。藏書家が自らの藏書が大切であればある程、その藏書を人に預ける時に、證文を渡さずして品物を渡して呉れる人は十人に一人もない。況や初対面の人をやである。私はこの一事は未だに忘れない。その時私は、先生所藏の貴重本の數々を拜見した。書物を購入する上の種々の珍談をもおきゝした。同じ本の前半を或る本屋が持つて来て、數日たつてその後半を全く關係のない本屋が持つて来て、こゝに完本になつた或る貴重本の話などは實に面白かつた

これは本の修理をする人の話であるが、かう云ふことは、讀みたいと云ふ誰に

でも度々やつたことである。

醫史學研究の產物として、藤浪さんには「日本衛生史」や「東西沐浴史話」の著があるが、なほ、日本の科學史に關する一大著述を計畫し、そのためには一切を擲つ決心を示された位であつた。然るに未だそれに着手しないうちに亡くなられたことは惜しい。

醫家先哲肖像集

醫家先哲肖像集は醫史學研究の一副本産物であると云ふことは、藤浪さんが此本の序文に斯う書いてゐることによつてもわかる。

「醫家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、畫像を展べて自ら像前に酒瓶を供へ、少年の自分にも共に禮拜せしめられたことを覚えてゐる。そして、その時は何時も、祖父の師に當る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た關係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた爲か、自分は何となく畫像に對してこよなき尊重愛惜の情念を持つこ

となり、次第に先哲の肖像を蒐集する機縁を醸成したのである。大正の大火灾に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに壹百六十餘種の畫像を藏するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この醫家先哲肖像集の一編である。

大正の火灾に遭つた自分の辛い経験から、失はれ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思ひ立ちながら、荏苒歲月が徒らに経過するのみで、遂に今日に及んだのであつた。……しかし、それ等は到底容易に蒐集得るものではない。偶々その人に擬すべき肖像を發見することもあるが、それが果して信すべきものかの眞否の鑑識は洵に覺束ないのである。又、名門の遠裔にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝醫道から觀て大切な先哲の肖像若干を收め得ざることは恰も歯の抜けたやうなものであるが、さはれ、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの醫家先哲肖像集一編を刊し、若し他日機あれば拾遺の編を出すを可なりとし、一先づ茲にこれを上版することにしたのである。』

即ち、藤浪さんのこの仕事は、藤浪さんの家に於ける幼年時代からの感化によるものであり、關東大震災前既にかなり多くの肖像が集められてゐたことがわかるのである。

藤浪さんの此の仕事は、醫史學的立場からなされたものであることは、同じ序文に、

「我が國には古くから畫像を家に傳へる慣はせがあり、醫家に於ても同じく壽像を作つたものが相當に多いのであつた。醫家は一つには社會的位置が比較的良かつた爲め、又他には生活も豊かであつたことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかつた譯である。乃ち醫家にありては、隨分世代に亘つて描かしめた肖像が傳つてゐるのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携へて家に歸り、その家に傳へると云ふやうなこともあるから、醫を業とするものゝ多いだけ、他に比すれば醫伯の像は世間に流布したものも稍々多いのであつた。然し石碑不及口碑存底の高踏主義から、畫像などに無頓着であつた名家もある。例へば蘭醫の大家桂川甫筑の一家、又は奈須玄壺、坪井誠軒などが畫像を遺さな

かつたことは周く知られてゐる所である。さりながら、後世から云へば、醫史考證の上から、又尊崇の情を満たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。随つて到底それに接し得ざるものがあれば、學界にとつての憾事の極みである」

とあるによつてもわかる。

まことに藤浪さんも云つてゐるやうに、日本の醫學は、奈良朝の僧醫時代から出發して、藤原平安時代の呪術治療、鎌倉時代の民間療法を経て、天正慶長時代の漢方醫學、江戸時代の蘭方、明治時代の洋方と、次第に進歩發達して、今日では決して泰西諸國の下に置かるゝものでないまでになつてゐるが、醫學をして斯くも進歩せしめたものは實にその間に輩出した醫聖先哲の力である。今日我が醫學が泰西諸國と比肩して毫も學術的進歩に劣らざるものは畢竟先哲の學問が捨石となり、その苦心が遺傳したからである。藤浪さんが、醫家先哲肖像集を編み、加ふるに一々その小傳を附した意味はこゝに在るのである。

茲にそれ等を思ひ廻らせば、先哲の鴻大なる學恩に對して、限りなき敬慕の情

に堪へ難いのである」と云ひなほ

「先哲の傳記を繙き、或は名家の遺墨を觀るときはその人の風格、その人の雅趣、その人の氣品を懷ひ、愛慕尊崇の念そぞろに禁じ難きを覺えるのである。しかしこれだけでは、まだその人物の全貌を窺知するに足りないのを遺憾とする。しかも、若しそこにその人物の影像があつて、親しく之れに對ふこととなればまた格別の感情が新たに湧き來つて、眞にその人に接するが如き思ひあらしめるのである。而して、嘗てその人の行狀記から想像した面影は、寫眞によれば案外の風姿であつたことに驚くこともあり、或は輕妙洒脱の筆蹟から考へた先哲は意はぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰ふこともある。おもふに、行狀記筆蹟などから、その人の風采を偲ぶは、恰も煙雨の懸つた山容を見るが如く、罩靄一たび晴れて、山景の眞を現はせば、峯嶺更に別様の觀あつて、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき傳記は、未だ眞にその人の人格風姿の全貌を傳へざる低調の非難を免れがたいのである。」

と云つてゐるが、これが藤浪さんの肖像畫に對する所懷である。藤浪さんは

即ち故人を偲び、故人の徳を讃ふるためには何うしても、その人の肖像によつて、さながらその人に接するが如きものがなければならぬと云ふ考を持つてゐるのである。

こゝに於いても亦、我等は、藤浪さんのまことを見取ることが出来る。藤浪さんのこれをなした理由は、單に醫史學的に先人の業蹟を見るばかりでなく、一つには自分自身、先人の徳を偲ぶためでもあり、それよりも大きな動機はかくする事によつて先哲の正しき姿を傳へんがためであつたのである。

而もなほ我々の忘れる事の出来ないのは、この肖像を集めるために藤浪さんは凡ゆる努力を惜まなかつたと云ふことであり、本にするときには一々これを自分の信頼する人をわづらはして寫眞にとらしめた程の熱情をもつて居たことである。

杉山檢校顯彰會

藤浪さんが名墓顯彰會や杉山檢校顯彰會のために盡したのは、醫家先哲肖像

集を編まれた氣持ちと一聯の思想的關係を持つ。否、と云ふよりは、全く同じ考への別の現はれもある。

先づ杉山檢校遺徳顯彰會について云ふならば、やゝもすれば按摩や針の先達と輕く見らるゝ杉山檢校の功績や徳を顯彰して再認せしめんがためであつたと共に、今日やゝもすれば甚だ輕視されてゐる按摩や針はその實日本獨特の日本醫學の重要ななる一部門を占むるものであることを世人に知らしめんためであつた。

前にも云つたやうに、藤浪さんは西洋醫學をおさめ、特に西洋醫學の最先端を行くレントゲンの醫學的研究に從事したにも拘らず、決してまた日本在來の醫學を輕んずるものではなかつた。隨つて漢方醫學や日本醫學の復興に努めてゐる多くの人々の崇敬措く能はざるものでもあつた。

勿論藤浪さんは、たとひ如何に日本醫學や漢方醫學の長所を認めてゐたとは、云へ、そのため西洋醫學を無視するやうな偏狭には陥らなかつた。

吾所主張亦活物窮理。尙軒岐而未必盡信其書。惡蠻貊而未必盡排共術。博

採諸五大洲中。日試月驗一次歸干活人。即是神州之醫道耳。

と云つた本間玄調のこゝろは即ち藤浪さん的心であつた。玄調について藤浪さんは云つてゐる。

「玄調は實驗科學者であり、自説の主張者でもあつたが又愛國者でもあつた。一世の大家たりし彼の學識思想は尙、今日青年學者の眷々服膺すべきものを含蓄することを感じ。一にも二にも泰西の亞流を以て甘んずる拜歐學者には胸に三尺の秋水を擬せらるゝの趣があるであらう。」

これによつて見ても、藤浪さんの學者的態度がわかると思ふ。歐羅巴盲拜時代而も、自ら歐洲に留學までして來た藤浪さんに、この心意氣があつたのは、即ち醫史學研鑽の賜に外ならないのである。

東京名墓顯彰會

私も一度、名墓顯彰會の機關誌である[掃蕎]に何か書けと云ふ手紙を藤浪さんから受取つたことがある。

ところが、當時私は名墓顯彰會のことも知らず「掃苔」の目的とするところも知らなかつたので、何でもこれは考古學的な雑誌のことであらうと思ひ、墓と云ふものが何うして立てられるやうになつたか、靈魂の信仰の起源は何であるかと云ふやうなことを考古學的な立場から書いて送つたが、それは遂に沒になつたことを覚えてゐる。

今から思ふとそれは當然なことで、甚だすまないこととしたと思ふ。實際人が死ぬと必ず何等かの墓標が建てられるのであるが、その家の没落した時のことは勿論のこと、さうでなくとも、年代を経ると顧みるもののがなくなつたり「先祖代々の墓」として合祀されたりして湮滅してしまふことの方が多い、さういふ場合、何等の功績を遺さなかつた人なら致方もないが、立派な仕事をしたり、立派な徳を立てたりした人の多くは、墓の堙滅と共に忘られてしまふことが多いのは悲しいことである。

まことの人、藤浪さん及び藤浪夫人が、この事業に心からの共鳴を感じられ、そのため多く忙しい時と貴重なる金とをさゝげられたのは醫家先哲肖像集

を編まれた心と同じである。

名墓顯彰會の機關誌であるからでもあらうが『掃苔』の『藤浪剛一博士追悼錄』號には實に、數多くの藤浪さんの掃苔事蹟が記されて居る。そのうちの一、二を拾つて見ても、藤浪さんは、富士川博士や津崎博士の如き名士と共に長谷の一向寺に田代三喜の墓を訪ねてゐる。小幡景憲や佐藤信淵、鈴木春山の墓も訪ねてゐる。曲直瀬玄朔の墓を訪ねてゐる。かうした掃苔行をされたことは恐らく前後三四十回を越ゆるであらう。而もその間に、これ等の先哲についての講演も屢々行つてゐる。

勿論これは藤浪さん一人のためでなく、雑誌『掃苔』や講演會の諸名士の講演によるのであるが、兎に角、かうしたことのため、今まで人の知らなかつた先哲偉人が再び人の意識に上り注意を引いたのは數かぎりなくあるであらう。このことだけでも私は、藤浪さんは偉大な善い仕事をしたと思ふ。

温泉と藤浪博士

藤浪さんと温泉との關係は深い。

昭和五年創立の日本温泉協會の理事たり。

昭和十年創立の日本温泉氣候學會の理事たり。

昭和十六年創立の日本温泉科學々會の副會長たり。

著書としても

〔温泉知識〕

〔温泉療法〕

〔東西沐浴史話〕

等がある。

日本が古くから有名な温泉國でありながら、科學的研究が行はれたのは蘭醫學が輸入されてからであるが、しかし蘭醫學時代のそれは、概ね幼稚であると云つてよい。

明治時代になつて漸次その發達を見たが、中にも明治十三年に出た桑田知明氏の「日本温泉考」やベルツ氏の「日本鑛泉論」等が、温泉知識を高めたのは事實であ

る。その後、温泉の學的研究は明治の中葉に至つて挫折した觀があるが明治四十五年に内務省が出した日本鑛泉分析表に至つてはじめて、日本温泉の成分が明らかにされた。そしてそれは更に進んで大正年間、鑛泉に含まるトエマネチオンの測定が行はれるに至つて、温泉が一般の注目を惹くに至つた。

物理療法を専門とする藤浪さんが、温泉の研究に着目したのは寧ろ當然なことであつたかも知れない。私たちはしかし、藤浪さんの温泉學は、從來の温泉學に一つの新しい方向を示したことを忘れてはならない。

試みに藤浪さんの著温泉知識一卷をとつて見ても、その内容の如何に豊富なるかに驚くであらう。中にも此書は、香に泉質の分析や治療のこととのみ終始せず、世界一の温泉國である日本が、温泉療法を重視する外人浴客を吸取することも不可能でないと云ふ見地から温泉場の設備や風紀のことまで及んで、温泉の改善をはかつたときは、温泉學に一新軌軸を開いたものと云ふべきである。

而もこれはたゞ書物の上の研究には止まらず、何事にも精根をさゝげ盡さず

んば止まない藤浪さんのことみて、このためには常に温泉地を巡つて視察し、研究し、その改善のために如何にすべきかを考察するを怠らなかつた。斯くの如き努力を経て成つたのが『温泉知識』であるが、此書の序文に於て藤浪さんは云つてゐる。

「江戸中期の醫家原芸庵は嘗つて城崎温泉に浴して

曩癖不廖將十春 溫泉來浴有奇勳

平素自負刀圭術 今日何圖被醫君

と吟じた。ゲーテは浴泉の魅力に憧れて各地を巡遊し、傍ら興を泉水の分析に寄せて、力をその事に盡した。ゲーテが不可解と稱せし泉水は、今日猶ほその不可解なるものを擱むことが出来ない。自然の現象は偉大であり、又精微である。それを社會政策上からするも、温泉の利用には多大なる考慮を拂ふべきであり、これを醫學上の立場よりするも、十分の效果を全うせしむべきことは、温泉を持つ國の當然研覈せざるべからざる吃緊の問題である。既に西洋の温泉國に於ては、定まつた國是が行はれて、國民の福祉のために盛んに利用厚生の途が講ぜ

られつゝある。我が國が温泉を持つ國としては世界一でありながら、その國策に就いては何等見るべきものもなく、普く國民に温泉の惠澤が與へられてゐない。今日、國民の保健が強く呼ばれて居るとき、温泉を持つ我が日本は宜しく茲に顧みねばならぬ。即ち温泉知識を新らたにし、一切の舊弊を一洗し、温泉開発の陣容を改めて、西洋の温泉國と轡を駒べて馳騁すべきである。即ち確乎たる温泉國策を樹立し、泉效の汎用を大にすべき機會に臨んでゐるのである。此際、余が抱ける平生の素志を大方の諸君に告げ、泉效のよつて現るゝ所以を説くも、亦た必ずしも贅冗の言たらざるを信ずる……」

これが即ち、藤浪さんの此書を著した抱負である。もつて藤浪さんは決して書齋のみの學者ではなく、その研究はまた、これを社會國家に役立てようとする實際的な希望のもとになされたことを知るべきであらう。

これは實に、藤浪さんの携はつた凡ゆる方面的研究に及んでゐる態度であつて、さきに述べた醫史學にしても、名墓顯彰のことにして、凡てはみなこの念願より出發したのである。

慶應大學の病院の仕事として、温泉治療室を設けたのも此の目的によるものである。

結語

藤浪さんについて書くことはこれで終らうと思ふ。その事業について、人となりについて、書くべきことはまだ澤山ある。けれど、つらつら惟んみるに、この思ひ出に私のみがあまりながら書くことはほかの人に対するまないことであるし、第一私が長く書けば書くほど、藤浪さんの遺徳を顯彰するどころかかへつて、その人格をけがす恐れがあるからである。

筆を擱くに當り私の感することは、私はこれを書くことによつて、生前の藤浪さんにより、より多くの善き感化を受けたことである。この事だけによつても、私は心からの感謝をさゝぐべきである。

願はくは藤浪さんの靈よ。私のこの不完全なふつゝかな獻げものゝ餘りにもお粗末なのを赦され度い。